

学生になお「保護者」が必要なのか 個別面談がある事に度胆抜かれた 私は大学の小学校化に反対である



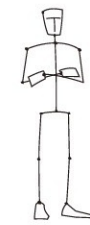
永田 和宏

12 保護者の皆さま

一步先のあなたへ

大学生になお「保護者」が必要なのか。いよいよこれからの自立のための、人生最後の教育機関の門をくぐるのに、「保護」してくれる親と一緒にするのは、ちょっとなあと思わないだろうか。まあ、入学式は目をつぶるにしても、卒業式での「保護者の皆さま」という呼びかけはなんとかならないものか。

数年前の東京大学の入学式で、特別荣誉教授の安藤忠雄氏が祝辞を述べたが、その内容が大きな話題を呼んだ。入学生約3100人に対して、保護者が5300人ほど二階席に陣取っているのを見て、この入学式を区切りとして、「親は子を切り離し、子は親を切り離せ」と呼びかけたのだそうである。「自立した個人を作るためには親は子を切つてほしい、本当の親子関係をつくるなかで、個人の自立があると考えます。個人の自立なくして、『独創力』や常識を疑う力はなかなか生まれません。」(東大式辞・告辞集より)と述べた。



話であったようで、安藤氏自身によれば「今日は子どもの自立の日だから、二階席の方は出て行ってください」とまで言ったのだそうだ。私は安藤忠雄氏のこの意見に深く同感するものである。せっかく大学に入ったのだから、ようやく卒業という晴れの日に迎りついたので、親と子と一緒に喜んで何が悪いという思いは確かにあろう。ともに喜ぶということは大切なことである。

しかし、大学は泣いても笑っても最後の教育機関。社会への第一歩を踏み出すところである。学生が社会へ出ていくとき、どのように自ら責任ある行動をとれるようになるか、その訓練の場としての意味を強く持っている。ついて行きたくとも敢えて、門口で送り出すという親の自覚こそが、子供に大学生になったという実感を与えることになるのではないか。

この頃の若者はひ弱で、なかなか親の許から放り出すことが



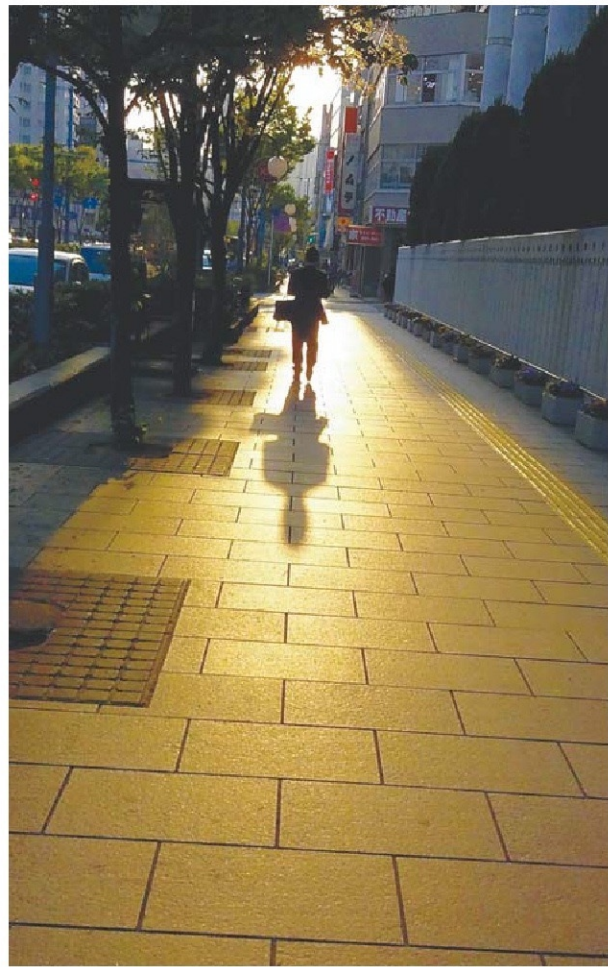
できないという話を聞く。親離れができなくてこぼす親もいる。しかし、子供がひ弱でも、親離れができないのでもなく、実は親の子離れができないことこそが、最大の問題なのである。大学で保護者に対する個別面談が行われていることを知ったときは、さすがに度肝を抜かれた。現に全国の多くの大学で開催されている。耳を疑うような話であるが、「大学の保護者面談」というキーワードでインターネット検索をしてみれば、その多さに驚くだろう。わが大学でも例に漏れず開かれているが、大学当局からのお叱りを覚悟で個人的な考えを言えば、私は、このような大学の小学校化には反対である。ある大学のホームページには、保護者と大学が連携しながら学生をサポートすることを謳っているし、ある大学では親との個別面談に成績通知書持参を求めている、こうなると「なんともはや」と言っしかない。

大学を卒業するという「その後」のことを考えれば、できるだけ早く、大学から「保護者」を排除したほうがいい。それがそれぞれの学生を安心して社会へ送り出すための大切な、そして必須のステップであろう。

そこで親離れができなければ、入社式に保護者が出席するなどという、もうジョークとしても笑えない事態が実際のものになっていく。おそらくは遠くない将来、子供の小学校の保護者面談に、保護者の保護者が付き添うなんてことにもなりかねないのである。

大学の入学式や卒業式に親や家族が出席するのが普通になってきた。これに文句をつける筋合いはないのだが、式辞や祝辞のなかで公然と「保護者の皆さまには…」などと言われているのを聞くと、ちょっと待てよと言いたくもなる。

本日はもう少しラディカルな



影法師

京都産業大教授(細胞生物学)、歌人

※コラムへの感想をメールでお寄せください。 minna@mb.kyoto-np.co.jp